

骨董と私 ⑪

哭竹生筍
-チクにコクしてタケノコを
ショウゼしむ-

武田整形外科医院(京都府)院長

武田 信巳

私は、近頃アルコールが過ぎると自慢気に、「僕は、三つの免許を持っている…」と話しを始めるようです。私は決して資格取得マニアではありませんが、その三つのライセンスとは医師免許証、運転免許証、それに古美術商及行商許可証です。前二者は、過去25年間と今後も生活の糧を得るために、また、気分転換を目的にしたバイクツーリング等のためにも必要なものです。本題の後者の免許証は、実際には古物を売買する際に要りますが、約30年余りの骨董蒐集歴を支えているものです。私のコレクションといっても、決して高価なお宝はありませんが、対象としては総じてシンプルモダンで、いわば自分が美しいと感じられたら、手元に置きたい衝動を抑え切れなくなる多種多彩なものがほとんどです。陶磁器(李朝・伊万里・六古窯)にはじまり、箆笥、椅子、布織物、鉄器、木工品、漆物、ガラス製品、浮世絵、民画、現代美術に見立てたジャンク等々、列挙に暇がありません。ところで、ここ約10年ぐらい力を入れて蒐集しているテーマの一つとして「雪中筍掘り」の図柄があります。これは昔の中国の孝行訓、



写真

右から伊万里赤絵蕎麦猪口、米袋、根付、伊万里豆皿、同鉢、蒔絵椀

つまり「二十四孝物語」の一つである哭竹生筍(竹に哭き筍を生ず)を指します。いわれは御存知と思われませんが、次のごとくであります。

三国時代に、幼い時に父と死に別れ、年老いた病気がちの母親と暮らしている孟宗という者がおりました。真冬の季節を迎えて母親の病気はもはや先がみえぬ状態で、この世の最後に筍が食べたいと訴え続けていました。親孝行の孟宗は春先にしかない筍を探して雪まじりの風の吹くおぼろ月夜に一人で竹林の中に分け行きましたが、案の定どこにもありませんでした。途方にくれた孟宗は竹に抱きつき、筍が欲しいと泣きながら大声で泣きました。これには天もさすがにこの孝心に感動したものとみえ、突然、雪面から真新しい筍をいくつも生えさせました。母親はこの筍を煮てつくった羹(あつもの)なますを食べ、病氣も奇跡的に快方に向かったという逸話です。

私がこの「雪中筍掘り」の何が気に入っているかというと、図柄自体が大好きな雪を背景としていてなかなか幻想的かつ超現実的で、また人物自体の表情や動作にバリエーションが多く蒐めがいがあることです。また、孝行物語に興味はそざられませんが、私の生活の周りに照らしてみると、病人物語では患者たる母親(とはそもそも我儘気儘であつて無理難題を時に発し苦労させられますが、真摯に取り組めば浅学非才な私でも必ず道は開けるようになる)では、この自戒を込めての勝手な思い入れもありそうです。

この図柄は主に蕎麦猪口に多く、写真はお気に入り点数ですが、他に陶磁器や漆器としての各種の皿、碗、酒器にとどまらず、水滴、印籠、胡銅花入、古瓦、佐渡八幡箆笥金具、絵紵、筒描、着物、袋物、袱紗、古書、軸等にあり、まだまだ奥が深そうです。このテーマを含め、私の骨董蒐集歴はさらに重篤になっており、有効な治療法はみあたりません。なにぶん患者本人に病識がなく、治癒したくないとみえて、どうも筍好きの孟宗の母親よりもずっと我儘のみつです。